１０月全校朝会講話　　令和６年１０月１日（火）

おはようございます。
本日の全校朝会の話題は、この夏世界を熱くしていたパリオリンピック、パラリンピックからの話題です。
オリンピックでは、日本選手団は金 20、銀 12、銅 13、合計 45 個のメダルを獲得。
米国、中国に続き世界 3 位の金メダル数でした。
パラリンピックでは、金 14 個、銀 10 個、銅 17 個　合計 41 個で世界全体でも 10 番目の金メダル獲得数でした。今回のパリでも、日本人選手の活躍は素晴らしかったでのですが、残念ながら東京パラリンピックでは銀メダルを獲得した車いすバスケットは、出場を逃しました。今日は、車いすバスケットの選手で上尾市にもゆかりのある選手を紹介します。

赤石竜我さん
あかいし・りゅうが●2000 年 9 月 11 日生まれ、埼玉県出身。24 歳
5 歳のときにホプキンス症候群により脊髄を損傷し、車いす生活になりました。
卒業後、川崎のチームに移籍し、この 9 月からドイツで車いすバスケットの選手として活躍中。
2017 年高校 2 年生の時に“U23 世界選手権”で国際大会デビューをし、大学生の時には東京パラリンピックでも日本代表となり出場しました。
攻撃的なディフェンスとそのスピードのあるプレーが魅力のひとつ。
みんなも知っている上尾高校出身ですね。
毎日北上尾駅までは電車通学をしていたそうです。高校を選んだ理由は駅から学校までの距離が近かったからだそうですが、上尾高校の
先生や生徒も車いすバスケに対して協力的で、学校全体で応援していてくれたそうです。
　そんな赤石さんですが、小学校の頃はさいたま市内の普通の小学校でしたが、エレベーターも学校にあり移動に不便を感じることはほとんどなかったそうで、車いすで鬼ごっこしたり、ドッチボールしたりと元気な暴れん坊だったそうです。
バスケに興味をもったのは、小学 4 年。3 つ上のお兄さんが中学でバスケ部に入ったことでした。お兄さんは、車いすではない普通のバスケですが、お兄さんと遊んだりする中で、また同級生が中学校でバスケ部に入って楽しそうにしているのを見て、本格的に車いすバスケを始めたのが中学一年だったそうです。入ったのは地元の強豪チーム埼玉ライオンズ。
競技用車いすに乗ったのは、中１から。乗りこなすまでに 1 年はかかったそうですが、ちょうど中１の 9 月。東京でのオリンピック、パラリンピックの開催が決まったそうです。
チームのコーチや仲間たちからは、「絶対うまくなる」と励まされて、その言葉を信じて、いつかこの人たちと対等にやれる日が来るとがむしゃらに中学時代は頑張っていたそうです。

中学１年生が見る、果てしない夢物語だった東京パラリンピック。
高校生になって同世代の選手が日本代表に選ばれていくなかで、自分は選ばれないという壁にあたった時に、今までのガムシャラな練習法じゃダメだと思い、このようなノートを取ることにしたそうです。何本シュートが入ったとか、角度ごとのシュート決定率のちがいとか。
そんな見直しをしながら頑張った成果もあり、高２で日本代表に選ばれたときは、あきらめずに頑張ってよかったな、と本当に感じたそうです。
大学生から、大学のある神奈川県で一人暮らしを始めた赤石さん。
家の中では、このよくあるタイヤ付きの椅子で移動したりといろいろな工夫が見られます。
車も足が悪くても乗れる車でどこにでも練習にでかけているそうです。
今は、ドイツリーグで頑張っている赤石さんですが、これからも応援したい人です。
きっとドイツでも車を運転して頑張っているんだろうな～と思います。
パラスポーツ全般を見ても、様々なルールが決めてあり、障害に応じた競い方やハンデを細かく定めています。
車いすバスケでもチームの総合力を統一するために、クラス分けというものもあります。
車いすバスケットでは、試合中コートの上の選手の持ち点が 5 人で 14 点を超えてはいけないというルールがあります。
軽い人は４．５を持っていて、重い人は１．０です。これは障害の軽い選手だけで構成されたりするのを防ぐためです。
赤石選手は腹筋は若干ききますが右足を動かすことができないため、持ち点は障がいが比較的重い部類の２．５だそうです。
先日、2 年生のバレーボールの授業を見学させてもらいました。まだ、バレー部のように、つないでゲームを楽しむのが難しいので、サーブでボールが相手側コートにきたら、一回アンダーか、オーバーハンドパスで受けたら、そのボールを仲間が落とさずキャッチしたら 1 点というゲームをしていました。
これも、技術面の苦手を克服するための工夫のひとつかな、と思いました。とても楽しそうにキャッチして本気でゲームをしていました。
世の中には、本当にいろいろな障害や苦手を補助できるものがたくさん出ています。
義足、義手、義歯。めがね。はさみ。ペットボトルのふたをあけるオープナー、一人で握れる食器、力のいらないテコの原理を使った包丁　など。一時的に、骨折して利き手が使えないなども含め、だれでも使う可能性があるアイディアグッズです。これらは、身体的な弱い部分をカバーするもののグッズですが、一人一台の端末が入ったことで、みなさんにもたくさんの利点が出てきました。例をあげたらきりがないのですが、おそらくみなさんも使って実感しているものがあるのではないでしょうか？
昔からある計算機もそうですね。
日本語、英語が読めない、書けない→翻訳ソフトの普及

文字を書くのが苦手、おっくう→タイピングなら楽だし、写真に残すこともできる
漢字が苦手→パソコンなら意味も調べやすい
小さい字が見えづらい→拡大機能
授業でわからないことがある→タブレットドリルで復習
いろんな人がいろいろな苦手を抱えていきています。
みなさんは、赤石さんが夢を持ち始めた頃と同じ中学生です。
自分の苦手にちゃんと向き合い、得意を伸ばすにはどうしたらよいか、自分を見つめる時期です。今できなくても、何年間後にできるようになっていればいいんです。
夢の実現までに遠回りをしてもいいし、何年かかってもいいんです。
人を見下す人は、中学生になれば、おそらく周りが大人なので言わないと思いますが、
常識のない人と思われています。友達の苦手な部分をいじるのではなく、こうしたらうまくいくんじゃない？とアドバイスをしたり、教えてあげることができる人の方がこれからの人生自分も楽しいことが増えていきます。
おまけに 9 月に意を決してドイツに行った赤石さんを紹介したく、今日はお話をさせていただきました。
みなさんに配ったプリントの「彩の国の道徳」の担当をしていた時に、2 人のメダリストを取材させてもらったときの写真です。